

## 変容するグローバリズムと人民元問題

佐賀大学大学院・張 鎬

### 要旨

最近国際収支不均衡問題をめぐって、人民元に対する切り上げ圧力が以前にも増して強まっている。その背景には米国の経常収支赤字拡大と中国の経常収支黒字拡大にある。特に中国の対米貿易黒字は膨大であることから、米国の大きな不満を呼んでいる。中国の外貨準備増加には驚くべきものがあり、二〇〇七年末にはすでに一兆五〇〇〇億ドルを超えている。発展途上国においては異常なことであり、世界最大の「債権国」となり、大金持ちになったかのように見えるが、中国経済を過大評価するわけにはいかない。

人民元切り上げ問題が盛んでいるが、人民元が過小評価されているという論拠は実は不明確である。一貫して人民元切り上げを強く求める米国の財務省さえ「国際収支の調整を妨げたり、貿易条件を有利にした目的で為替政策が実行されたと認定できない」と発表しているくらいである。

また、米国の経常収支赤字膨張を理由にした「ドル危機説」が数年にわたって唱えられてきたが、実際ドル危機は起きていない。二〇〇七年夏、サブプライムローン危機で、欧州の銀行がドル流動性不足危機に陥ったくらいである。ドルが急落するなかでドル資産離れが加速化されるはずなのに、世界の資金は米国証券と石油など一次産品に逃げてしまったのである。本当に米国が累積債務に苦しむ借金国であるとすれば、このような国に貸し続ける投資家は世界に存在しない。「ドル危機説」は再考の余地が大きいようである。

人民元切り上げ問題を論じる場合、普通に経常収支を基準に議論されているが、これにも再考の余地がある。グローバリズムのなか、資本取引は経常取引をはるかに超えており、旧来の国際収支論はこのグローバル経済の実態を説明できないからである。

米中間の経常収支不均衡が問題となっているが、これには米国・中国・東アジアの三角貿易構造というトライアングルが背景にある。このなかで中国は「世界の工場」と称され、加工貿易に専念する。外国企業とりわけ米国企業の付加価値は高く、中国のそれは低い。外国企業は利益を得て、中国人は職を求めることになっているが、雇用の解決は中国の経済社会安定にもつながっている。米国の産業構造から見て、人民元を大きく切り上げても、米国の経常収支赤字問題は解決できない。しかも、中国の産業はかつての日本のような国際競争力を持たないので、人民元の大幅な切り上げは、中国産業に直ちに打撃を与えることになる。こうなると、中国がすでに抱えている深刻な雇用問題、所得格差問題、不良債権問題、財政問題等構造的な問題が連鎖反応を起こし、大きな社会、政治問題が起これかねない。中国にとって、人民元の大幅な切り上げには幾つか大きな障害があるのである。

キーワード：国際収支不均衡問題、人民元、不良債権